

火と水のイメージを用いた描画法の基礎的研究

島本 裕美子

I 問題と目的

1 火のイメージを用いた描画法について

描画法とは、治療的・診断的側面を持つ心理検査であり、特に臨床場面では治療者と患者のコミュニケーションの一環として使用されることも少なくない。描かれた絵には、描き手自身の内的世界がイメージのままに留まらず、紙という現実的な媒体を通してより鮮明に意識化することを援助する働きがある。イメージを絵にすることの意義について老松（2003）は、本来実体のないイメージをリアライズすることであり、文章による記録とはリアリティの程度が異なると指摘している。さらに、描画とは物語を紡ぎだし、生命を与えるのに役立つとも述べている。つまり、描画とは言語化出来ないイメージを表現可能にする技法であるといえる。例えば中井久夫により考案された風景構成法 The Landscape Montage Technique（以下 LMT と略す）は、川や山などのアイテムを順に描いてもらって風景を構成するという心理検査であり、描いた本人もそれと意識することなしに一つ一つのアイテムに込められた思いを雄弁に語ってくれる（山中, 1984）。また、スイスの心理学者コッホにより草案されたバウムテスト（樹木画テスト）は、木の姿を描き手自身の投影と見なす「実のなる木を一本描く」テストであり、カスティエラ, D.D. (2002) によれば、樹木画は被検者が自発性と独自性を示し得るも

ので、深い個性の語られていないすべてをも表現してしまうと述べている。

他にイメージのもつ象徴性に着目した描画法として、佐藤（1978）により考案された「火焰描画法」と、石田（1994）により考案された「火のある風景描画法 Fire in Landscape Technique（以下 FLT と略す）」が挙げられる。佐藤（1978）は火について、われわれがヒトになるための最初のパートナーであり、われわれの心の底に流れている原初心性の象徴的な媒介者であると論じ、火焰描画法を考案した。火焰描画法では無地の白紙をタテ長のみで使用する。当初は事務用赤鉛筆で試行されたが、後にバーミリオンの色鉛筆が使用されている。教示は「燃え上がっている焰を描いてください」であり、火以外に他のものを追加して描いても制止は行わない。火焰描画法の評定は、描画された焰のもっている比較的客観的な側面を検討する大きさや描画線の密度、焰の形態等の特性によって記号化されている。しかし、火焰描画法では描かれた火焰全体から伝わる印象を研究視座に入れておらず、客観的な指標開発に留まっている。結果、火焰描画法とロールシャッハ・テストとの間には、線の密度を除いて有意な連関がわずかしかなく、両者間における質的な類似性は実証的研究では明らかにされなかった。これは、数量化可能な指標だけでは捉えきれない描画の側面を意味し、質的な視点も考慮される必要があることを示唆していると思われる。

一方 FLT は、描かれた風景全体から描き手の内的世界に関する情報が得られる可能性に着目し考案されている(石田, 1996)。これは、火焰描画法が描かれた世界の個々の特性に焦点を当て、描画を部分的に分断して作成された指標から構成されているのに対し、FLT では描かれた風景を統合された一つの世界として捉え、描画全体から伝わる印象を視点に入れて考案されていることを示している。FLT とは、B 鉛筆、18 色色鉛筆、A4 サイズ画用紙、消しゴムを用いて、「心の中に思い浮かんだ火のある風景」を自由に描いてもらう描画法である。石田(1999)は火について、火は生命や性(生殖)とも関連が深く、また「攻撃性」を象徴すると同時に「死と再生」といった「二面性」をも象徴すると論じ、描かれた火から描き手の情緒(感情・情動)的側面をアセスメントするためのヒントが得られるのではないかと(石田, 2000a)と論じている。また FLT において、健常群と臨床群との描画内容や描画形式の差異を比較したところ、「破壊的な火」が臨床群被検者に有意にみられることを明らかにした(石田, 1994)。「破壊的な火」とは、火事や爆発など破壊的な内容の火のことを指す。さらに、攻撃性(これは暴力行為など外に向かう攻撃性と自殺のように自己に向かう攻撃性の二つ)を行動化しやすい被検者に「破壊的な火」が多くみられたとも報告している。その後の研究では、情緒の安定にもなって火の輪郭線を描くものが半数近くみられたことから、輪郭線を描くことは自我の統合機能と関係しているのではないかと考察している。これは、情緒的安定性が悪化すると火の形態や輪郭線が崩れる傾向からも推測されている(石田, 2002)。

2 火と水のイメージについて

FLT では、火と水を関連させて描く被検者

が見られたことから、石田(2000b)は火と水の関連は矛盾や対立を表す一方で「変容」や「癒し」を引き起こす力を示しているのではないかと論じ、水は火(本能的欲動)が統制できなくなることの不安を無意識的なレベルで軽減しようとする防衛機制を示しているのではないかと考察している。さらに火と水について、古事記や日本書記、インドやイランにおける神話、フロイトの精神分析学との関連についても言及している(石田, 2000b)。しかし、FLT において水はあくまで FLT を理解するための補助的要因にすぎず、FLT では火のみを人の心と結びつけて取り上げている。

だが、FLT で考察されている火の「攻撃性」や生と死の二面性に関しては水にも表現可能であると思われる。例えばバシュラール, G. (1969) は、水は生と死の両義的イメージを混合していると述べ、さらに水についてエリアーデ, M. (1974) は、洪水のシンボリズムとして人間が水に吸収されることによって、新しい人類の時代が開始されるという循環的概念を導き出している。また、水が死を司っていることに関して Hillman, J. (1979) は、古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスを引用しつつ、錬金術¹⁾における有名な銘である「全てが水となるまで決して作業を行なう」という言葉と、ヘラクレイトスの「魂にとって水になることは死であり、魂にとって濡れるということは喜びというよりも寧ろ死である」という水と死に纏わる言葉に関連付け、作業²⁾は死の中で始まると指摘している。つまり、錬金術では魂を作り上げるサイクルの一過程として水の作業³⁾があり、水の作業⁴⁾自体が絶えず生と死が循環しているプロセスなのである。加えて、錬金術における水のイメージを取り上げているエディンガー, E. (2004)によると、水は錬金術作業の一つ溶解を表しており、それは洪水神話が神によって引き起こさ

れるように自己³⁾によって引き起こされ、自己と自我⁴⁾はその時対峙し、弁証法の中で価値あるものは残り、無価値なものは分解されて作り直される浄化のプロセスであると述べられている。洪水神話は不遜な人々の心に向かって神の怒りや嘆きを浴びせるものである。このように怒りの波は、物質世界を飲み込み新たな世界を形成するという生と死の役目を担っているのである。

以上のことから、火が一切を燃やすことによって再生を促すのならば、水もまた一切を飲み込むことによって再生を促し、火が突発的な感情や情緒を表現するのならば、水も洪水や嵐のイメージによって抑制不可能な感情や情緒を表現すると考えられる。よって、火の「攻撃性」や生と死の二面性に関しては水にも表現可能であると思われ、火のイメージを重視するのであれば水のイメージについても重要であることを指摘したい。すなわち、火にとっての水を単なる補助的要因と捉えるのではなく、火と水を同等と捉えることで人の心を一方向にだけ限定しない、乃至は一方に偏らない調和の取れた世界として看過しないことが重要であると考えられる。

3 火と水の相補的な関係について

しかし、火と水は上述したような「攻撃性」や生と死の二面性に関して必ずしも同質の意味を備えたイメージを表現しているのではなく、寧ろ対等なイメージを所有していると考えられる。この火と水の関係についてバシュラール、G. (1969) は、イメージが組み合わせを望むならばそれは二元素の組み合わせであり、水はその反対物である火と結びつく」と指摘している。そして元素の結合はすべて結婚であり、よって三者の結婚というものはないと断定した上で、水と火よりも偉大な生殖者はないとも言及して

いる。ロバーツ、G. (1999) もまた、一つの元素はそれぞれ二つの気質を有しており、熱と乾である火は、寒と湿である水の対立物であると述べている。さらに、ユング、C.G. は対立物について「一対の対立物のうち一方だけを追究することは不毛であるということを示唆している。つまり対立物は実際にはつながっており、分離することはできず、互いに包みあっている」と指摘し⁵⁾、この働きを補償 (compensation)⁶⁾と呼んでいる。この補償の概念から火と水の関係を見てみると、両者を一言に対立的関係と捉えるのではなく、両者の性質を補い合える相補的な関係と捉えることが可能となる。つまり、火と水は両価的な意味合いをもち、其々が独自に絶対的に存在しているのではなく、互いが互いを補い合える唯一の関係として相対的に存在していると考えられる。よって両者の存在は一方に応じて一方の関係や役割を規定しあう存在であり、他では代用のきかない唯一無二の関係性の上に成り立っていると考察される。つまり、火と水は共に「攻撃性」や生と死のイメージを表現しながらも、其々の元素特有の気質のために二つ揃って一対を成す対立的な存在であると考えられる。これはすなわち、同じ攻撃性と生死のイメージを表現するからといって、火の存在が水の存在の代用となることはないということである。この二者関係を無視してしまえば、バシュラール、G. (1990) のような火の配偶者としての水の側面、水の配偶者としての火の側面を共に喪失してしまい、火と水は自らの両性具有的な生の二極を生きることが出来なくなってしまう。このことから、火と水は対立物であるが故に婚性的性格をもつという、逆説的な相補性の中で初めて存在を可能としていると考察される。

しかしここで着目しておきたいことは、火と水両者はただ思弁的に相補性の中で存在を可能

としているのではなく、これらの事象を臨床的に考えるならば「火」の意識的内容と無意識的内容⁷⁾、「水」の意識的内容と無意識的内容の対決が、矛盾と緊張に耐えていくというユング, C.G. (1994) の個性化⁸⁾ 過程を示唆しているということである。ユング, C.G. (1991) によると、個性化の過程を表すシンボル形成は錬金術のイメージ (とくに「結合」^{コニウクチオ}) と多くの類似を示しており、このシンボルは意識と無意識の対決による今後の展開を知るために臨床上重要なものであると考察されている。この「結合」^{コニウクチオ} を錬金術的に示せば「黄金」や「石」などといった純化された対立物であり、また心理学的に示せば対立物を同時に体験することである (エディンガー, E., 2004)。心的な対立物を同時に経験することは葛藤状態を引き起こすであろうが、このことについて橋本 (2004) は、それらが分離しながらも融合することによって新しい生き方を認識するための弁証法が促されると必要があると指摘している。つまり、火と水を対立物であるが故に影響を及ぼし合う存在であると仮定するならば、その葛藤状態から臨床上新たな知見が得られる可能性が考えられよう。

本研究では、対立物として認識可能であり、また描画という手段によって表現しやすくなる「火」と「水」のイメージを用いて、その双方イメージの類似性及び差異を検討するべく新たな描画法の開発を試みる。この新しく開発された「火と水のイメージを用いた描画法」の指標について、その妥当性と意味を実証的に明らかにし、考察することを目的とする。

II 方法

1 予備調査

1) 「火と水のイメージを用いた描画法」の考案について

「火と水のイメージを用いた描画法」とは、A4 (縦 297mm, 横 210mm) 用紙に 2B 鉛筆と消しゴムを用いて始めに円を一つ描き、次にその円の中に火と水のイメージを描き、最後にどちらが火と水かわかるように矢印で示すものである。特徴として初めに円を描くことが挙げられるが、火と水という対立的なイメージを表現する際、筆者は普段意識されていない葛藤や心的緊張をも表現してしまうのではないかと危惧し、何か枠組みで保護すべきではないかと考えた。しかし、中井の枠づけ法 (中井, 1974) では四角の枠となり、そこに火と水のイメージを描くと“風景”になってしまうと思われた。風景とは事物の具体性を捉えているという意味では意識的関与の強いものである。筆者は、ユング, C.G. の個性化研究の中で多くの曼荼羅 (サンスクリット語で円) が扱われていることを参考にし、円という枠の中でならより無意識的な心の動きが汲み取れるのではないかと考え、初めに円を描いてもらうことにした。初めから円の描かれた紙を用いなかったのは、ユング, C.G. (1991) が述べるように円が心理学的に自己の全体性を表すのであるなら、規定された円ではなく描き手自身の意図のもとに描かれた円に意義があるのではないかと思われたためである。よってこの円には、多くの描画で用いられている“枠”としての意味と、円自体が生命の萌芽であり自己の全体性を表すという二つの意味がある。

2) 指標の選定について

描画を解釈するための指標は、火焰描画法や

FLT、アヴェ＝ラルマン、U. が開発した星と波テスト (2000)、ファース、G.M. (2001) の絵をみる注目点、レボヴィッツ、M. (2002) の解釈等を参考にした。さらに予備調査を行い、そこでのデータ (女子 26 名, 男子 6 名, 平均年齢 20.19 歳, SD1.36) を基に出現率の高い特性を参考にし、最終的に 15 の指標⁹⁾を採用した。この 15 の指標は 2～5 の下位項目を持ち、さらに「円構造」、「内容構造」、「補助指標」の三つに区分される。「円構造」は円の大きさや形などの指標から構成されている。「内容構造」は円の中の火と水に関する指標から構成されている。「補助指標」は、円の中に描かれた火と水がわかるように矢印で示す際、その矢印が円を貫通しているのか、円に接触していないの

か、等を判定するものである。また、予備調査データを基に筆者自らが作成した指標についても以下表 1～表 5 にて一覧表としてまとめてある。その際、指標の分類が妥当であったかどうかを検討するため、指標を基に筆者を含めた計 3 名で個別に描画を分類し、本調査での被調査者 102 名の描画の一致率も算出したため、次頁の表 1～表 5 にて定義と合わせて括弧内に記載した。なお、本論の一致率は被調査者一人の描画について評定者 3 名の内 2 名の評定が一致していた場合を 66% とし、102 名分を平均した一致率の小数点第 3 位を繰り上げたものである。一致率が 80% 未満のものについては表記する際一致率に下線を引いてある。

3) 各指標の説明及び定義

表 1 円構造の指標定義 (各指標名の下に括弧内で記載されている % は指標の一致率である)

円の大きさ (88.33%)	①巨大	視覚的に円が紙の範囲いっぱい描かれていて、特に大きい円だと判断できる場合。
	②大きい	視覚的に円が大きいと判断できる場合。
	③中程度	特に目立った大きさや小ささを感じず、中程度だと判断できる場合。
	④小さい	視覚的に円が小さいと判断できる場合。
	⑤極小	視覚的に円が特に小さく、紙のスペースがほとんど使用されていないと判断できる場合。
描線の引き方 (96.67%)	①一本線	一本の線のみで、途切れずに連続して描かれたもの。
	②複数線	何本もの、分断され連続していない線で描かれたもの。
円の形 (92.67%)	①安定	円の形が、視覚的に正方形の枠の中に収まると判断できる場合。
	②不安定	円の形が横や縦に伸び、視覚的に長方形の枠の中に収まると判断できる場合。
筆跡のタイプ (84.39%)	①繊細	さほど力を入れずに引かれた線で、描線が細い。
	②やわらかい	さほど力を入れずに引かれた線で、描線が太い。
	③鋭い	筆圧が強く、描線が細く鋭い。
	④しっかりした	筆圧が強く、描線が太くしっかりしている。

表2 内容構造の指標定義I (各指標名の下に括弧内で記載されている%は指標の一致率である)

絵の分類 (75.76%)	①要点のみのパターン	非常に簡素で、指示通りに火と水が描かれたものである。たんととしていてドライ。
	②絵画的なパターン	単に物体が描かれているのではなく、一つの絵画作品のような印象を与える。要点のみの絵よりは生き生きとした反応がみられるもの。
	③感情のこもったパターン	明らかに情緒的な要素が優位なもの。趣や雰囲気がある。
	④形式的なパターン	絵画的な絵と類似しているが、こちらは装飾的な要素が目立ち、技巧的な印象を与えるもの。
空間の使い方 A (73.59%)	①火と水のバランスが良い	火と水の大きさに極端な偏りがなく、数も揃っている場合(火が二つなら水も二つ描くなど)。
	②火の優位	水よりも火を大きく描いているまたは火を複数描いている場合。
	③水の優位	火よりも水を大きく描いているまたは水を複数描いている場合。
B (92.06%)	①火と水が独立している	火と水が融合しておらず、それぞれが独立に存在している場合。
	②火と水が繋がっている	火から水、水から火への循環または一部が結びついている場合。
	③火と水の混在	火と水が重なって描かれているもの、または火の中に水、水の中に火を描く場合。
物の象徴 (95.06%)	①陰影付け	他の部分に比べて影をつけている箇所がみられる場合。黒く塗りつぶしてあるものがみられる場合も含む。
	②大きさの強調	円の中の表現において、火または水のどちらかの大きさの強調が顕著にみられる場合。
	③エッジング	円の縁に沿って火や水が描かれているもので、全体像がつかめず、部分的にしか描かれていない場合。火や水が円からはみ出ているものも含む。
	④絵の中の言葉	円の中に言葉を用いた表現がみられる場合。ex)“鍋”の絵に“ナベ”と書かれているなど。
	⑤火が複数ある	飛火ではなく、ある程度の大きさとまとまりをもった火が2つ以上みられる場合。ex) ガスコンロの火とろうそくの火など(ただし、ガスコンロの火はそれぞれ一つずつカウントせず、まとまりをもった一つの火としてカウントする。)
	⑥水が複数ある	飛沫ではなく、ある程度の大きさとまとまりをもった水が2つ以上みられる場合。例えば雨と川など(ただし、雨の粒はそれぞれ一つずつカウントせず、まとまりをもった一つの水としてカウントする。)
火の密度 A. 火のみ (89.45%)	①1~3本ほどの輪郭線のみで描かれる場合。	
	②4~6本前後の線で描かれている場合。	
	③30%~50%の範囲が塗られている場合。	
	④50%以上の範囲が塗られている場合。	
B. 火以外 (95.67%)	①1~3本ほどの輪郭線のみで描かれる場合。	
	②4~6本前後の線で描かれている場合。	
	③30%~50%の範囲が塗られている場合。	
	④50%以上の範囲が塗られている場合。	
	⑤燃焼物が描かれていない場合。	

表3 内容構造の指標定義Ⅱ（各指標名の下に括弧内で記載されている%は指標の一致率である）

水の密度	① 1～3本ほどの輪郭線のみで描かれる場合。
A. 水のみ (87.39%)	② 4～6本前後の線で描かれている場合。
	③ 30%～50%の範囲が塗られている場合。
	④ 50%以上の範囲が塗られている場合。
	⑤ 50%以上の範囲が塗られている場合。
B. 水以外 (97.00%)	① 1～3本ほどの輪郭線のみで描かれる場合。
	② 4～6本前後の線で描かれている場合。
	③ 30%～50%の範囲が塗られている場合。
	④ 50%以上の範囲が塗られている場合。
	⑤ 容器が描かれていない場合。
火の形態 (87.13%)	① A型 三角形・富士山型の、下の広い三角形の炎の型の場合。
	② V型 逆三角形の、上に広がった炎の型の場合。
	③ H型 茶筒型・寸胴型の、上下の差のない炎の型の場合。
	④ O型 上記の三型に分類されない丸い炎の型（楕円状やろうそくの炎の型）の場合。
	⑤ X型 上記の四型に分類されない特殊な炎の型の場合。
水の形態 (96.81%)	① A型 水滴や雨など三角形の水の型の場合。
	② O型 海や湖、水溜りなど比較的円状の水の型の場合。
	③ U型 グラスや壺など、容器内の水の場合。
	④ I型 川や滝など、比較的直線の水の型の場合。
	⑤ X型 上記の四型に分類されない特殊な水の型の場合。
火の輪郭線 A (86.39%)	① 一本線で描かれた輪郭線のみの場合。
	② 何本もの線でなぞるような輪郭線を描いている場合。
	③ 火の中心部に輪郭線がみられる場合。
	④ 輪郭線と中心部にも輪郭線がみられる場合。
	⑤ 輪郭線がみられない場合。
B (97.37%)	① 一本線で描かれた輪郭線のみの場合。
	② 何本もの線でなぞるような輪郭線を描いている場合。
	③ 燃烧物の中心部に輪郭線がみられる場合。
	④ 輪郭線と中心部にも輪郭線がみられる場合。
	⑤ 輪郭線がみられない（燃烧物なしも含む）場合。
水の輪郭線 A (73.55%)	① 一本線で描かれた輪郭線のみの場合。
	② 何本もの線でなぞるような輪郭線を描いている場合。
	③ 水の中心部に輪郭線がみられる場合。
	④ 輪郭線と中心部にも輪郭線がみられる場合。
	⑤ 輪郭線がみられない場合。
B (97.67%)	① 一本線で描かれた輪郭線のみの場合。
	② 何本もの線でなぞるような輪郭線を描いている場合。
	③ 容器の中心部に輪郭線がみられる場合。
	④ 輪郭線と中心部にも輪郭線がみられる場合。
	⑤ 輪郭線がみられない（容器なしも含む）場合。

表4 内容構造の指標定義Ⅲ（各指標名の下に括弧内で記載されている%は指標の一致率である）

飛火 (98.67%)	①あり	飛火がみられる場合。
	②なし	飛火がみられない場合。
飛沫 (98.33%)	①あり	飛沫がみられる場合。
	②なし	飛沫がみられない場合。
燃焼物 (97.67%)	①純粹な火	観念的に存在を可能としている火。燃焼物は描かれていない。
	②燃焼物あり	燃焼物が描かれている火。
	③その他	観念的でもなく、燃焼物も描かれていない火。
容器 (90.71%)	①純粹な水	観念的に存在を可能としている水。容器は描かれていない。
	②容器あり	容器が描かれている水。
	③その他	観念的でもなく、容器も描かれていない水。

表5 補助指標の指標定義（指標名の下に括弧内で記載されている%は指標の一致率である）

矢印の使い方 (97.33%)	①矢印が円に接触している場合。
	②矢印が円を貫通している場合。
	③矢印が円に接触していない場合。
	④矢印記入なしの場合。

2 本調査

1) 対象者と時期

調査対象者は関西圏内の公立A大学学生69名（男子23名、女子46名。平均年齢18.78歳、SD1.03。有効回答率100%）と、国立B大学学生41名（男子31名、女子10名。平均年齢20.58歳、SD1.25。有効回答率80.49%）の計102名（男子50名、女子52名。平均年齢19.36歳、SD1.38）であった。調査は2005年6～7月に行った。

2) 調査内容

調査は、火と水の描画課題と、指標の意味検討に用いる4つの尺度（日本版BAQ、認知的熟慮性—衝動性尺度、MAS、自我強度尺度）により構成された質問紙を用いて集団法により試行された。A大学では69名分の回答が得られたが、人数が足りなかったため、不足した分は偏差値・環境等の類似したB大学の学生41名に集団法により施行し補足した。描画はA4の白ケント紙、鉛筆は三菱の2Bのみを使用した。消しゴムは各自の持ち物を使用してもらい、

持ち合わせがない被調査者のみ貸し出した。指示は「先に円を一つ描いて、その円の中に火と水の絵を描いてください。どのような火や水でも構いません。絵の上手下手を見るものではありませんので、描ける範囲で自由に描いてください。消しゴムの使用に制限はありませんが、紙の使用方向は縦長の状態で描いてください」とした。4つの尺度については、①火が「攻撃性」を象徴するのであれば、火と水のイメージどちらに攻撃性または衝動性の表現が強く表れるのかを考察するため、日本版BAQ、認知的熟慮性—衝動性尺度との関連をみる。また、②火と水の表現はどちらが不安と結びついているのかを考察するためMASとの関連をみる。さらに石田（2002）が指摘しているように、③輪郭線の強調や輪郭線を描くこと自体が自我の強さと関係しているのかを考察するため、キャテル、R.B.の自我強度尺度との関連をみる。これらの関連結果については4章の総合的考察で取り上げることとする。

3) 質問紙内容

(1) 日本版 BAQ (以下、日本版 BAQ 全体得点を BAQ と略す)

バスとベリーの攻撃性質問紙 (BAQ) をもとに、攻撃性を多次元的に測定する尺度として安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井 (1999) によって作成された 24 項目からなる尺度である。日本版 BAQ は、怒りの抑制の弱さや喚起されやすさを測定する情動的側面である「短気」、他者に対する否定的な態度や信念を測定する認知的側面である「敵意」、暴力の正当化や衝動など身体的攻撃反応を測定する「身体的攻撃」、自己主張など言語的攻撃反応を測定する「言語的攻撃」の 4 つの特性を測定する下位尺度によって構成されている。全体得点が高いほど自我防衛が高く、内省や抑制傾向は低い。下位尺度ごとに項目の評定を単純加算し、下位尺度得点を合計して全体の尺度得点とする。

(2) 認知的熟慮性-衝動性尺度

従来子どもを対象とした MFF (同画探索検査) という図版課題であった認知的熟慮性-衝動性尺度を、滝間・坂元 (1991) が大人を対象として開発したものであり、10 項目からなる。ある判断をするのに、より多くの情報を収集したうえでじっくり考えて結論を下す人と、ある程度の情報で早急に結論を下す人の違いを、認知的熟慮性-衝動性という。尺度得点が高いほど熟慮性が高いと判断する。

(3) MAS (Manifest Anxiety Scale, 顕在性不安尺度) (MMPI 新日本版研究会, 1993)

テイラ, J. が実験場面における遂行度に影響を及ぼす高低の動因 (不安) 水準をもつ被検者を選出するために作成した尺度である。その後改訂されていき、顕在性不安の定義に従った 50 項目から構成されている。合計得点が高いほど不安水準が高く、低得点は不安水準が低い。

(4) 自我強度尺度 (キャテル, R.B.・エバー, H.W., 1982; カンソン, S.・オデル, J.W., 1985)

16PF は、パーソナリティの精細な、しかも簡便な客観的検査法として、長期にわたる心理学の基礎的研究を基盤にキャテル, R.B. により開発されたものである。16 個の人格因子は、理論的にはそれぞれ独立している。本研究では、16PF の因子 C (以下自我強度と称す) の 13 項目のみを独立して使用する。この自我強度が高得点だと情緒が安定しており、適応力が高く、忍耐強いとみなされる。低得点だと情緒が不安定で感情的であり、動揺しやすいとみなされる。

III 結果と考察

1 指標の妥当性

指標の妥当性を検討するために一致率を算出した結果、80%未満の一致率を示した項目は全項目中 10 分の 1 に留まった。この結果、全体としては指標分類の妥当性が確認されたといえるだろう。しかしながら 80%未満の一致率を示した指標は指標判定の基準自体に不都合があると考え、今後再検討されるべきである。今回、指標の意味検討には一致率の結果に関係なく全ての指標を対象とした。

2 4 尺度の得点化と男女比較

回収した質問紙 (BAQ とその下位尺度 4 つ、認知的熟慮性-衝動性尺度, MAS, 自我強度) を男女別に得点化した (表 6)。

次に、データの正規性を確認するため正規性の検定を行った。その際、データが 30 以上であったため Kolmogorov-Smirnov の検定を採用した (表 7)。結果、BAQ 全体得点では女性の得点に 5% の有意差が確認され、続いて BAQ の下位尺度である「短気」でも女性の得点に 5% の有意差が、男性の得点には 0.1% の

表6 男女別の尺度得点の平均値・SD・中央値 n=102 (男子50名, 女子52名)

	男子			女子		
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
BAQ 全体得点	68.64	9.93	67.00	63.63	10.59	61.00
短気	19.14	12.66	16.00	14.73	3.59	14.00
敵意	16.06	3.25	15.50	18.38	4.61	19.00
身体的攻撃	19.22	4.81	18.50	16.15	5.17	15.50
言語的攻撃	15.30	2.94	16.00	14.35	3.63	14.00
熟慮衝動	27.50	5.83	28.00	26.65	6.54	27.50
MAS	18.36	7.71	18.00	19.10	8.59	18.00
自我強度	14.56	4.74	15.00	14.60	5.05	14.00

表7 Kolmogorov-Smirnov の正規性の検定結果 n=102 (男子50名, 女子52名)

	性別	統計量	自由度	有意確立	p 値
BAQ 得点	女性	.134	52	.020	$p < .05$
	男性	.123	50	.057	n.s.
短気得点	女性	.128	52	.034	$p < .05$
	男性	.248	50	.000	$p < .001$
敵意得点	女性	.099	52	.200*	n.s.
	男性	.128	50	.040	$p < .05$
身体得点	女性	.097	52	.200*	n.s.
	男性	.128	50	.039	$p < .05$
言語得点	女性	.110	52	.163	n.s.
	男性	.134	50	.025	$p < .05$
衝動熟慮得点	女性	.083	52	.200*	n.s.
	男性	.094	50	.200*	n.s.
MAS 得点	女性	.093	52	.200*	n.s.
	男性	.079	50	.200*	n.s.
自我強度得点	女性	.086	52	.200*	n.s.
	男性	.097	50	.200*	n.s.

*.これが真の有意水準の下限である。

有意差が確認された。さらに「敵意」では男性の得点に5%の有意差が、「身体的攻撃」や「言語的攻撃」においても男性の得点のみに5%の有意差が確認された。認知的熟慮性-衝動性、MAS、自我強度の3尺度には有意差が確認されなかった。このことから、下位尺度を含むBAQ尺度のみデータの正規性が認められず、認知的熟慮性-衝動性、MAS、自我強度の3尺度にはデータの正規性が認められることが分かった。よって、正規性が確認された尺度とさ

れなかった尺度とで、男女差を比較するための検定を分けることとした。

まず、正規性が確認されなかったBAQ全体得点並びにその下位尺度には、ノンパラメトリック検定を用いて男女差を検討した。採用したのはMann-WhitneyのU検定である(表8)。次に正規性が確認された認知的熟慮性-衝動性、MAS、自我強度の3尺度には対応のないt検定を行った(表9)。

Mann-WhitneyのU検定を行った結果、

表8 BAQ 全体得点と下位尺度の Mann-Whitney の U 検定結果 n=102 (男子 50 名, 女子 52 名)

	BAQ 得点	短気得点	敵意得点	身体得点	言語得点
Mann-Whitney の U	914.500	987.500	902.000	860.500	1045.000
有意確率	.010	.036	.008	.003	.086
p 値	p<.05	p<.05	p<.01	p<.01	n.s.

表9 認知的熟慮性-衝動性尺度、MAS、自我強度尺度の t 検定結果 n=102(男子 50 名, 女子 52 名)

尺度	t 値	有意確率
熟慮衝動	t=-0.69	n.s.
MAS	t=0.46	n.s.
自我強度	t=0.04	n.s.

BAQ では 5% の有意差が認められ、男子のほうが女子よりも攻撃性が高いことが分かった。BAQ の下位尺度においても、「短気」では 5% の有意差で男子のほうが有意に高い。しかし、「敵意」では 1% の有意差で女子のほうが有意に高く、「身体的攻撃」では 1% の有意差で男子のほうが有意に高いことが確認された。「言語的攻撃」では男女差に有意差は認められなかった。

安藤他 (1999) の研究結果によると、BAQ 全体得点では男子の方が女子よりも有意に高いという結果が示されている。しかしながら、今回の調査で得られた BAQ に関する性差は、関西圏内の国公立大学に通う男女大学生という被調査者の特質を考慮に入れる必要があると思われる、BAQ の一般的な性差として解釈すべきではないことを留意したい。

また、対応のない t 検定を行った認知的熟慮性-衝動性尺度 ($t(100) = -0.69, n.s.$)、MAS ($t(100) = 0.46, n.s.$)、自我強度 ($t(100) = 0.04, n.s.$) においては、男女間で有意差は認められなかった。これらの結果も被調査者の特質を考慮した上で取り扱っていくこととする。

3 描画指標と各尺度との関連

次に、各尺度の中央値を境にして、高得点群

を高群、低得点群を低群と分類し、各描画指標と χ^2 検定を行った (認知的熟慮性-衝動性尺度の場合、得点が高いと熟慮性が高く、低いと衝動的と判断されるため、高群を熟慮性、低群を衝動性と名付けた)。指標における男女差には同じく χ^2 検定を用い、 2×2 のクロス表に関してはイエーツの補正を施した χ^2 検定の有意確率を、期待度数・実測度数共に 5 未満のセルがあった場合はフィッシャーの直接確率検定の有意確率を採用した。以下では、各尺度と筆者の作成した指標の有意確率を 5% 水準以下のものを取り上げ、尺度の概念定義¹⁰⁾に基づいて考察していく。

1) 円構造と各尺度との関連について

(1) 輪郭線と自我強度について

「描線の引き方」では 5% の男女差 ($\chi^2 = 4.64, p < .05$) が確認され、円の描線を複数線で描く者は男子に多かった。また「円の大きさ」と自我強度では 5% の有意差 ($\chi^2 = 10.07, p < .05$) が確認され、円を大きめに描く比率が高いと自我強度が高く、中程度から小さめに描く比率が高いと自我強度が低いことが分かった (表 10、表 11)。

また、「火・輪郭線 A」の男女差については 5% の有意差 ($\chi^2 = 12.47, p < .05$) がみられ、火の輪郭線を一本線で描く者は男子に多く、輪郭線と中心部を描く者は女子に多いことが確認された (表 12)。

しかしながら、今回の結果では火の輪郭線と自我強度尺度との間に何の関係も見出されなかった。石田 (2002) が指摘するような火の輪

表10 描線の引き方と男女のクロス表

		$\chi^2 = 4.64, p < .05$		
		男子	女子	合計
描線の引き方	一本線	44	52	96
	複数線	6	0	6

表11 円の大きさと自我強度のクロス表

		$\chi^2 = 10.07, p < .05$		
		低群	高群	合計
円の大きさ	巨大	2	7	9
	大きい	11	21	32
	中程度	23	16	39
	小さい	13	6	19
	極小	2	1	3

表12 火の輪郭線 A と男女のクロス表

		$\chi^2 = 12.47, p < .05$		
		女子	男子	合計
火・輪郭 A	輪郭線なし	0	2	2
	一本線	4	14	18
	複数線でなぞる	7	8	15
	中心部輪郭	0	1	1
	輪郭線と中心部	41	25	66

郭線と自我の統合機能との関連といった傾向については、この結果を踏まえて次章の総合的考察で扱うこととする。

2) 内容構造と各尺度との関連について

(1) 火と水に見られる濃淡表現の違い

「火・陰影付け」と MAS との間に 5% の有意傾向 ($\chi^2 = 9.26, p < .5$) がみられ、火に陰影がみられると不安が高いことが分かった。また、比率で考えたときに陰影がみられないと不安が低い傾向にあることも分かった (表 13)。

さらに、陰影付けと類似する結果を示した指標に「密度」がある。密度とは描かれた形態の面積がどの程度塗りつぶされているかを判定する指標でもあり、そういった意味では陰影付けと類似する指標である。以下では火の密度 A の結果について取り上げる。

表13 火の陰影付けと MAS のクロス表

		$\chi^2 = 9.26, p < .05$		
		MAS		合計
		低群	高群	
火・陰影	あり	3	15	18
	なし	50	34	84

表14 火の密度 A と BAQ のクロス表

		$\chi^2 = 10.16, p < .05$		
		BAQ		合計
		低群	高群	
火・密度 A	1～3本線	38	35	73
	4～6本線	10	3	13
	30～50%	2	8	10
	50%以上	1	5	6

「火・密度 A」と BAQ との間には 5% の有意差 ($\chi^2 = 10.16, p < .5$) がみられ、火が 4～6本の線で描かれていると攻撃性は低い傾向にあり、全体の 30% 以上が塗りつぶされていると攻撃性が高いことが分かった。しかし、1～3本線で描かれている場合は攻撃性の高低に差はみられない (表 14)。

他に、BAQ の下位尺度である「身体的攻撃」と「言語的攻撃」の間には共に 5% の有意差 ($\chi^2 = 9.29, p < .5$)、($\chi^2 = 7.93, p < .5$) がみられ、火を 4～6本の線で描くと「身体的攻撃」と「言語的攻撃」が低く、全体の 30% 以上が塗りつぶされていると「身体的攻撃」が高いことが確認された (表 15、表 16)。

さらに、MAS との間に 5% の有意差 ($\chi^2 = 10.78, p < .05$) がみられ、全体の割合として火を 1～3本線で描く比率が高いが、その中でも少ない描線で火を描くと不安が低く、全体の 30% 以上を塗りつぶすと不安が高いことが分かった (表 17)。

これらの結果から、火の陰影付けや同じ内容の指標である火の密度に有意差が確認されたものの、火の燃焼物である密度 B や水自体の陰

表15 火の密度 A と「身体的攻撃」のクロス表

	身体的攻撃		
	低群	高群	合計
火・密度 A 1～3本線	32	41	73
4～6本線	11	2	13
30～50%	3	7	10
50%以上	2	4	6

$$\chi^2 = 9.29, p < .05$$

表16 火の密度 A と「言語的攻撃」のクロス表

	言語的攻撃		
	低群	高群	合計
火・密度 A 1～3本線	33	40	73
4～6本線	11	2	13
30～50%	6	4	10
50%以上	2	4	6

$$\chi^2 = 7.93, p < .05$$

表17 火の密度 A と MAS のクロス表

	MAS		
	低群	高群	合計
火・密度 A 1～3本線	45	28	73
4～6本線	5	8	13
30～50%	2	8	10
50%以上	1	5	6

$$\chi^2 = 10.78, p < .05$$

影付けや密度 A、B においては有意差が確認されなかった。つまり、水に陰影がつけられていてもその表現が不安を意味するとはいえず、火に陰影がみられた場合のみその表現は不安と関わりを持つことが確認された。

また、この「火・密度 A」の項目は、厳密に言うとな線の本数と塗りつぶしの範囲という本来ならば区別すべき指標が混在している印象を与えるが、本研究では基礎的な研究ということで、先行研究としてあった火焰描画法で用いられていた指標に、対立物である水の指標を付け加えて構成したものである。しかし、関連のあった尺度は異なるものの、「火・陰影付け」での結果の区分のされ方と、「火・密度 A」での結

果の区分のされ方を検討するに、描かれている対象物が線で描かれているのか、乃至は塗りつぶされているのかについては異質なものが混在していると思われる。よって、今後は指標を「線で描かれているもの」と「塗りつぶされているもの」とに類別し、特に後者については「30%以上が塗りつぶされているものを陰影付けと定義する」などと改めたほうが適切であろう。

4 結びとして

1) 総合的考察

以上の結果を鑑み、2章で考察対象として述べた3点について総合的な考察を試みる。

まず、「①火が「攻撃性」を象徴するのであれば、火と水のイメージどちらに攻撃性または衝動性の表現が強く表れるのか」については、火の指標にのみ BAQ 及び下位尺度との関連性が見られたことから、火の表現のほうが攻撃性を表していると考えることが出来るであろう。また、認知的熟慮性—衝動性尺度と火の尺度との関連は見られなかったが、衝動を表す BAQ の下位尺度である身体的攻撃と火の尺度の間には有意差がみられたことから、火の表現のほうが衝動性を表現しうるといえよう。

次に「②火と水の表現はどちらが不安と結びついているのか」については、「火・陰影付け」や「火・密度 A」との間でのみ MAS との関連が確認されたことから、火の表現が不安と結びついていると看做すことが出来る。

最後に「③輪郭線の強調や輪郭線を描くこと自体が自我の強さと関係しているのか」については、円の大きさとキャテル、R.B. の自我強度尺度との間で有意差が確認されたものの、肝心の火の輪郭線との間に有意な傾向は確認されなかった。これは、石田 (2002) が指摘するような臨床的に観察される自我の強さと、キャ

テル, R.B. の自我強度尺度で測られる自我の強さとが対応していないことも一つには考えられる。

しかしながら、水の指標はどの尺度との間にも関連性は確認されなかった。このことについては、火とは異なる水特有の性質が浮き彫りとされた感はあるものの、筆者が水の性質を捉えきれずに安易に先行研究の指標と対応する指標を作成したことも原因として考えられるだろう。特に、A型、O型等といった本研究での形態指標は、先行研究である火焰描画法で作成された火の形態に、筆者が行った予備調査で確認された水の形態を加えたものであるが、火・水の形態指標は共に男女差も見られず、尺度との有意差も確認されなかった。つまり、川の絵が描かれているからといって安易に水のI型と評定してしまうのではなく、中島(1996)が指摘するようにLMTにおける川の流れは無意識レベルの圧力に抗して自分を表現する力を示すという意味で「無意識の“流れ”」ではないかと考え、そもそもの川や滝等が持つ実際の動きのある表現がクライアントにとって何を意味し、表現しうるのであるのか、に着目するべきなのではないだろうか。

2) 問題点と今後の課題について

今回筆者が作成した指標は、石田(1996)が指摘するような描かれた絵全体からの印象に着目した指標というよりは、佐藤(1978)が作成した客観的な指標を題材としているところが多い。そのため、水本来の個性という視点が指標作成時に抜け落ちていたのかもしれない。水本来の個性というものを扱うにあたって、例えばHillman, J. (1979) は夢の中で水に参入することは清新で新しい流動性を齎すため、水と情緒(欲望、感情)等は区別されると述べ、バシュラールの言葉を引用しながら水の言語は比喩的な夢

想のために豊かであると指摘している。さらにアンデルセン, K. (1992) はゲルマン人の信仰を題材に、魂は誕生前水の中におり、死後再び水の中へ舞い戻ると述べており、人間の人生は根源的な元素としての水へと溶け込んでゆくと考察している。つまり、水の表現は火のように攻撃性や衝動性といった単一的な解釈には当て嵌まらない、独自の性質が前面に押し出された元素と考えられるだろう。よって、思弁的には火と水は「攻撃性」や「生と死」を司るモチーフかもしれないが、本研究結果を踏まえて、水本来の個性とでもいうべきものをより熟慮して指標を作成することが必要となるであろう。

さらに、火と水は相補的に関係し合うとまでは本研究結果からは言及することが出来なかった。今後は、水のイメージの持つ独自性や絵全体からの印象などを細かく吟味することを通して、火と水を共に描くことによって得られる臨床的有用性等も考慮しながら研究を進めていくことが望まれるであろう。

〈付記〉本論文は京都ノートルダム女子大学人間文化学部生涯発達心理学科に提出した卒業論文に加筆・修正を加えたものである。論文の作成にあたりご指導いただいた神戸女学院大学人間科学研究科の國吉知子教授をはじめ、質問紙調査の実施にご協力いただいた大阪府立大学人間社会学研究科の川原稔久教授、橋本朋広准教授、データの扱い方など多くのご指導いただいた京都文教大学臨床心理学研究科の名取琢自教授、そして調査にご協力下さった学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

IV 参考文献

アンデルセン, K./渡辺学(訳) 1992 水の夢—心のダイナミズムについて 春秋社 (Karin

- Anderten 1986 *Traumbild Wasser-von der Dynamik unserer Psyche* Walter-Verlag AG.)
- 安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井 1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, No5, 384-392.
- カステイラ, D.D./阿部恵一郎 (訳) 2002 バウムテスト活用マニュアル 精神症状と問題行動の評価 金剛出版 (Denise de Castilla 1994 *Le test de l'arbre Relation humaines et problemes actuels* Masson, Paris.)
- キャテル, R.B.・エバー, H.W. (原著者) /伊沢秀而・山口薫・Tatsuoka, M.M.・茂木茂八・内山武治・上野一彦 (日本版著者) 1982 16PF 人格検査手引 日本文化科学社
- エディンガー, E./岸本寛史・山愛美 (共訳) 2004 心の解剖学 錬金術のセラピー原論 新曜社 (Edward Edinger 1985 *Anatomy of the Psyche* Open Court Publishing Company.)
- エリアーデ, M./久米博 (訳) 1974 豊饒と再生 せりか書房 (Mircea Eliade 1968 *Traite d'Histoire des Religions* payot, Paris.)
- フランツ, M.-L.F./垂谷茂弘 2000 ユング思想と錬金術—錬金術における能動的想像— 人文書院 (Marie-Louise von Franz 1997 *Alchemical Active Imagination* Shambhala.)
- ファース, G.M./角野善広・老松克博 (訳) 2001 絵が語る秘密 ユング派分析家による絵画療法の手引き 日本評論社 (Gregg M.Furth 1988 *The Secret World of Drawings:Healing Through Art*.Sigo Press.)
- バシュラール, G./小浜俊郎・桜木泰行 (訳) 1969 水と夢—物質の想像力についての試論 国文社 (Gaston Bachelard 1942 *L'Eau et les Reves:essai sur l'imagination de la matiere Corti*.)
- バシュラール, G./本間邦雄 (訳) 1990 火の詩学 せりか書房 (Gaston Bachelard 1988 *Fragments D'une Poetique Du Feu* Presses Universitaires de France.)
- 橋本朋広 2004 自我とイメージの弁証法 心理療法における治療の機序 心理臨床学研究, 22, No.2, 140-151.
- Hillman James 1979 *THE DREAM AND THE UNDERWORLD* PERENNIAL LIBRARY.
- 石田弓 1994 火のある風景描画法 (Fire in Landscape Technique) にみられる「破壊的な火」の意味するものについての一考察 広島大学教育学部紀要第一部 (心理学), 43, 199-205.
- 石田弓 1996 火のある風景描画法に関する基礎的研究—健常者と分裂病者の描画内容と描画形式— 日本描画テスト・描画療学会 臨床描画研究 X I pp.214-237.
- 石田弓 1999 臨床描画法に表されるイメージ・象徴的表現の理解—火のある風景描画法を通して— 現代のエスプリ 至文堂/至文堂 (編), 387, 76-83.
- 石田弓 2000a 火のある風景描画法を「読む」ためのヒント (I) —火のもつ象徴的意味について— 徳島大学総合学部 人間科学研究, 8, 35-54.
- 石田弓 2000b 火のある風景描画法を「読む」ためのヒント (II) —FLTにおける「太陽」と「火と水の関連」が象徴するものについて— 徳島大学総合科学部 人間科学研究, 8, 55-74.
- 石田弓 2002 火のある風景描画法に関する基礎的研究 (II) —描き手の状態変化と描画特徴の変化の関連について 日本描画テスト・描画療学会 臨床描画研 16 pp.172-189.
- ユング, C.G./林道義 1991 個性化とマンダラ みすず書房 (Carl Gustav Jung 1976 *Uber Mandalasymbolik*. GW9- I, Walter-Verlag.)
- ユング, C.G./林道義・磯上恵子 (訳) 1994 転移の心理学 みすず書房 (Carl Gustav Jung 1958 *Die Psychologie der Ubertragung*. GW16, Walter-Verlag.)
- ユング, C.G./野田倬 (訳) 1982 自我と無意識の関係 人文院書 (Carl Gustav Jung 1964 *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewubten*, GW7, Walter-Verlag.)
- カーソン, S.・オデル, J.W./伊沢秀而・内山武治・茂木茂八 (訳) 1985 16PFの臨床的利用 日本文化科学社 (Samuel Karson, Jerry W.O'Dell 1976 *A Guide to the Clinical Use of the 16PF*.)
- レボヴィッツ, M./菊池道子・溝口純二 (訳) 2002 投影描画法の解釈 誠信書房 (Marvin Leibowitz 1999 *Interpreting Projective Drawings:A Self Psychological Approach* Taylor&Francis.)
- MMPI 新日本版研究会 (編) 1993 新日本版 MMPI マニュアル 三京房
- 中井久夫 1974 枠づけ法覚え書 芸術療法, 5, pp.15-19.
- 中島登代子 1996 競技者と風景構成法 山中康裕 (編)

- 風景構成法その後の展開 岩崎学術出版社 pp.183-218.
- 老松克博 2003 アクティブ・イマジネーション—ユング派から見た描画と物語 日本描画テスト・描画療法学会 臨床描画研究 18 pp.6-21.
- リーネル, B・杉浦京子・鈴木康明 (著) 2000 星と波 テスト入門 川島書店
- ロバーツ, G/目羅公和 (訳) 1999 錬金術大全 東洋書林 (Gareth Roberts 1994 *The Mirror of Alchemy* The British Library.)
- サミュエルズ, A・ショーター, B・プラウト, F/山中康裕 (監訳) 濱野清志・垂谷茂弘 (訳) 1993 ユング心理学辞典 創元社 (Andrew Samuels, Bani Shorter and Fred Plaut 1986 *A Critical Dictionary of Jungian Analysis*.)
- サミュエルズ, A/村本詔司・村本邦子 (訳) 1990 ユングとポストユングアン 創元社 (Andrew Samuels 1985 *Jung and the Post Jungians*.)
- 佐藤忠司 1978 火炎描画法 ロールシャッハ研究 X X, 99-116.
- 佐藤忠司 2004 火炎描画法の採用サイン 臨床心理査定アトラス 培風館
- 滝間一嘉・坂元章 1991 認知的熟慮性—衝動性尺度 堀洋道 (監)・山本真理子 (編) 2001 心理測定尺度集 I—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉—サイエンス社 195-198.
- 山中康裕 1984「風景構成法」事始め 山中康裕 (編) 中井久夫著作集 別巻風景構成法 岩崎学術出版社 pp.1-36.

注

- 1) フランツ, M-L.F. (2000) は、錬金術とは自分自身の人格に働きかけなければならない作業であると述べている。換言すると、錬金術とは単なる科学変化による物質の変容が目的ではなく、内的な変容過程に対するメタファの役割を示しているのである。
- 2) 錬金術でいうところの作業を意味する用語である。
- 3) ユング, C.G. の提唱した元型の一つで、個人または個人を超えた全てを包括する人格の中心。

- 4) 意識の中心であるとするユング, C.G. の概念。ユング, C.G. は、個性化の過程の中では自我と無意識が対決する必要があると述べている (ユング, C.G., 1982)。本研究では、キャテル, R.B. の自我強度によって測られる自我とユング, C.G. の概念である自我とは区別する。
- 5) サミュエルズ, A/村本詔司・村本邦子 (訳) (1990), 159 ページより引用。
- 6) 補償とは、有機体の自己調節 (ホメオスタシス) 的な機能に相当し、無意識が意識に対して均衡をもたらそうとする機能である (サミュエルズ, A・ショーター, B・プラウト, F., 1993)。
- 7) ユング, C.G. の想定した無意識とは意識と相対関係にあるという。そして無意識とは二つあり、一つは抑圧されているが意識化可能な無意識部分を個人的無意識、もう一つはこころの奥深くにあり、遺伝的に世界中の人々に共通しているとされる集合的無意識である (ユング, C.G., 1982)。
- 8) 個性化 (individuation) とは、二つの基本的葛藤から生じる一つの過程ないし発達過程のことを指す (ユング, C.G., 1991)。
- 9) (1) 円の大きさ、(2) 描線の引き方、(3) 円の形、(4) 筆跡のタイプ、(5) 絵の分類、(6) 空間の使い方、(7) 物の象徴、(8) 火の密度、(9) 水の密度、(10) 形態、(11) 火の輪郭線の強調、(12) 水の輪郭線の強調、(13) 飛火、飛沫、(14) 燃焼物・容器の描写、(15) 矢印の使い方、の 15 個である。
- 10) 本研究で取り扱う攻撃性の概念定義は、全体得点が高いほど自我防衛が高く、内省や抑制傾向は低い。また、「短気」は怒りの抑制の弱さや喚起されやすさを測定し、「敵意」は他者に対する否定的な態度や信念を測定し、「身体的攻撃」は暴力の正当化や衝動など身体的攻撃反応を測定し、「言語的攻撃」は自己主張など言語的攻撃反応を測定する。自我強度の概念定義は、高得点だと情緒が安定しており適応力が高く、忍耐強い。低得点だと情緒が不安定で感情的、動揺しやすい。

Abstract

Basic Research on Drawing Method Using Images of Fire and Water

Yumiko SHIMAMOTO

In this paper, a new drawing test, involving images of “fire” and “water” perceivable as opposing elements, no less than easily expressed in drawing, was developed in order to examine similarities and differences between these images. Fifteen indexes for interpreting the newly developed “Drawing Method using Images of Fire and Water” were adopted, based on interpretations of Fire in Landscape Technique (FLT) and Star-Wave Test, as well as response frequency during pilot testing. The nature of the indexes was examined by comparing them with scores from the Japanese version of BAQ, Cognitive Reflection-Impulsivity Scale, MAS, Ego-Strength Scale. First, the validity of the indexes was examined by calculating the interrater agreement between three index ratings, and it was found that less than one-tenth of the total number of indexes showed inter-rater agreement of less than 80%, therefore confirming the validity of the indexes. Next, relationship of the indexes with the four scales was examined, and found that the indexes of “Fire” showed significant differences as they related to BAQ and MAS, however indexes of “Water” were not related with any of the scales. Based on these results, it is suggested that future study should aim to create more indexes by including unique attributes of image of water, and general impressions from the whole drawing as well, while taking into account the clinical significance of drawing fire and water in concert.

Key words : Opposing Elements, Images of Fire and Water, Drawing Method